「日々の理科」（第 1106 号） 2017（H29),-7,17

「キジの親子（２）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

しばらくすると、少し離れたところにいたオスが「ケーン！」と一声だけ発した。すると、牧草の隙間に隠れていた雛が一斉に姿を現した。オスの一声は「大丈夫、どうやらあいつは安全なようだ、移動しろ！」という意味なのだろう。

いるわ、いるわ！写真に写っているだけでも、雛は７羽もいる。「ピヨピヨ」の声で正体はばれていたが、それにしても雛たちの「隠れ身の術」は見事だった。牧草の緑と雛の毛色は似ていないが、意外にも「自然の隠し絵」になっていたようだ。

母親鳥は、もう一度周囲の安全を確認して、町道を先頭で渡り出した。雛たちは「ピヨピヨ」言いながら、お母さんについてゆく。こういう光景は、テレビの自然番組や図鑑ではよく見るが、私はキジの親子では初めて見た。面白い！（２ページ目に拡大画像あり）

こんなに小さい。ウズラの成鳥よりも小さい。背後のタンポポの葉と比べると大きさがよくわかる。

キジの成鳥は、もちろん空を飛べる。（実は飛ぶのは苦手で、めったに飛ばない）雛はもちろん飛べないので、歩く（走る）ことだけが移動手段である。親鳥は背中に載せてくれないので、生き延びるためには自分で走るしかないのだ。

牧草から姿を現した時にはよくわからなかったが、町道を渡る時に数えたら、雛は９羽もいた。９羽もの雛を安全に移動させるのは大変だろう。

母親鳥は、そのへんもちゃんと心得ている。まず、道の途中までは雛が走る速さに合わせて先頭を歩く。道の反対側の森まで渡れる目途がたつと、今度は雛たちを先に渡らせて、自分は周囲を警戒する。「ああ、これは教師が小学生を引率して、横断歩道を渡らせる時と同じだな」と妙に感心してしまった。

わずか 20 秒ほどで全員町道を渡りきり、雛たちの大冒険は無事に終了した。